

地域から考える世界史の授業

対馬から考える倭寇

山口県立宇部西高等学校教諭

藤村 泰夫

1. 「地域から考える世界史」の今日的意味

平成 26 年（2014 年）1 月 7 日、下村文部科学相は、海外で活躍するグローバル人材の育成のために、日本史の必修化を提言した。確かに、世界を舞台に仕事をする多くの日本人が、様々な場面で、日本の伝統や文化についてたずねられ、立ち往生するという話はしばしば聞く。また、欧米での日本酒ブームや世界文化遺産に和食が登録されたことにより、毎年、多くの外国人が来日するようになり、日本の伝統や文化について説明をする機会も多くなった。しかし、忘れてならないのは、和食は、もともと、中国や朝鮮半島の食文化に起源を持つということだ。その後、長い年月の間に、日本流に熟成された。だが、悲しむべきことに、今日、それらの国々と、領土問題、アジア太平洋戦争の歴史認識をめぐり、対立感情が醸成されている。

つまり、いつのまにか、東アジア世界と日本とがつながっているという自明のことが忘れられているわけである。

そこで、私は、日本の将来を担う中高生に対し、日本の伝統・文化や歴史を世界の中で考える教育、「世界の中の日本」を提言したい。具体的には、中学・高等学校の歴史教育において、世界史と日本史を関連させながら学習することだ。例えば、「蒙古襲来」を 13 世紀、世界を席卷したモンゴルの世界遠征の中で考えさせることだ。モンゴルの世界遠征の文脈で考えれば、モンゴルの敗北は、単に日本の武士が勇敢に戦ったからだけではなく、高麗や東南アジアでの抵抗が関係していることがわかる。

ところで「世界の中の日本」を考える歴史学習は、1956 年に歴史学者の上原専禄が、「日本史と世界史の統一的把握」を提唱して以降、研究者や教師によって実践が積み重ねられてきた歴史を持つ。今日では、世界史教科書の中にも「世界史と日本史のつな

がり」という項目が設けられ、18 世紀後半、ロシア近海へ漂流した伊勢の船頭大黒屋光太夫や 16 世紀世界の 3 分の 1 の銀を産出した石見銀山などが内容として掲載されている。しかし、新しい内容は、現場ではエピソードの一つとして扱われたり、受験に関係ないから割愛するといった扱いしかされていない。

このような現状に対して、2008 年日本学術会議は、高等学校地理歴史科のカリキュラム改革を打ち出し、歴史に関しては、世界史の中で日本史を扱う「歴史基礎」を提言した。また街の書店でも、「世界史と日本史が同時にわかる」という題名の本が多く見受けられるようになった。こうして「世界史の中で日本」をとらえる視点が、市民権を得ていく中で、忘れられているのが、地域と世界のつながりだ。上原は、「日本史と世界史の統一的把握」を唱えた時、日本史的現実と世界史的現実の交錯する場として地域を重視した。北海道から沖縄までの日本列島各地には、他国との交流の跡や、他国から影響を受けた跡が随所に見受けられる。まさに、地域の中に日本史や世界史への入り口があるといえる。そこで、今回は、日本史と世界史が交錯する場所として長崎県の対馬から倭寇について考える授業を行ってみた。

2. 「対馬から考える前期倭寇」

長崎県対馬市では、1980 年から本格化した毎年 8 月の日韓の市民約 400 人による朝鮮通信使行列が、対馬市の寺社から盗まれた仏像をめぐり日韓に対立がおきたため、昨年は中止となっていた。

しかし、本年、5 月 15 日、対馬市の朝鮮通信使行列振興会は、再開することを決めた。

それでは、行列中止の背景となった仏像の返還をめぐる問題とは、どのようなことか、朝日新聞によれば、次のようになる。

2012年10月、対馬の寺社から仏像2体が盗まれた。海神社社の「銅造如来立像」（国重要文化財）と観音寺の「観世音菩薩坐像」（県有形文化財）。韓国内で警察に押収されたものの、菩薩座像について、韓国の浮石寺が所有権を主張し、大田の地方裁判所は、それを認めて、移転禁止の仮処分を出した。韓国メディアも「14世紀の倭寇に盗まれたものだ。」との論調を展開し、2体とも韓国に残されたままで膠着状態が続く。（朝日新聞西部版2014年2月25日付）

生徒には、まず、韓国に対するイメージを聞き、次に朝日新聞の記事を読ませて、対馬に返還するか、しないかを理由をつけて書かせた。それは、次の通りになった。

対馬の仏像をめぐる記事への意見

【韓国から対馬へ返却する意見】12人

- ・対馬に返してほしい。昔、倭寇がとったことは、すごいいけないことだけど、今は「日本」にあるのだから。
- ・もともと日本にあった仏像なら、韓国側はその仏像を日本に返却すべきと思う。それと（先生の話によると）、日本も昔、韓国と同じことをしたならば、日本もとったものは、返すべきと思う。
- ・韓国の言い分である「倭寇に奪われた」とあるが、日本から言えば、今回のことは韓国の言う「倭寇に奪われた」のと一緒に思う。
- ・返すべきだと思う。市民団体リーダーの僧侶が言っているように、「これらは、盗難品だから、元の場所に返すべきだ。」と思った。何百年前の物を取り返したという話は、おかしいのではないか。

【対馬の仏像を韓国から返却しない意見】11人

- ・もともと韓国の仏像だから、対馬へ返却してもしなくてもよい。
- ・元々、韓国の物だから、返さなくてもいいと思う。交流が途絶えても、それはしょうがない。
- ・対馬に元々あったんなら返してほしいと思うかもしれないけど、1番最初にあったところは、韓国だったから別に返す必要はないと思う。
- ・もともと韓国にあったものは、韓国がとっていいと思う。でも奪い方に問題があると思う。
- ・14世紀に韓国で倭寇に盗まれたということは、当時から韓国にあってとても大事なものだと思うか

ら返さなくていいと思います。

以上の意見を生徒に提示した後、「対馬の仏像は、倭寇が盗んだものか」「倭寇は何ものか」をテーマにして授業を行った。

まず、倭寇に関する教科書本文を見て、次の点を聞く。

- （1）倭寇は、もともと、どのような人がなったか。
- （2）倭寇は、どこの国の人が多いか。
- （3）倭寇を多く輩出した松浦地方や壱岐、対馬はどこにあるか。

生徒に答えさせながら、「倭寇」の実態について対馬の歴史を基に指導した。その結果は次のようになった。

- ①「倭寇」には、松浦地方や壱岐・対馬などの日本人が関係していたことは事実だが、賊を皆、日本人と見るのは間違いだ。特に高麗の末期、国情が乱れた頃、「倭寇」の大半は、朝鮮の民であったことを『朝鮮王朝実録』も指摘している。
- ②「倭寇」の頭目は、身分は武士であり、対馬の島主宗氏の家臣だが、その家柄の格により、「知行」（あてがわれた土地）に差があり、下級武士の土地は狭いので、商人となって高麗に通行する者もいた。良い田が無く、物産の乏しい対馬などの九州北部の島々では、食料を自給することが難しく、昔から漁業や朝鮮との私貿易で生計をたてていた。蒙古襲来によって、交易が難しくなった時、船団を組み、武装して朝鮮や中国沿岸を襲うこともあった。
- ③倭寇の頭目の一人早田氏は、早くから中国やベトナム及びタイなどと交易していた。

上記のことをふまえて、現代の韓国メディアの「14世紀の倭寇に盗まれたものだ。」という主張について考えさせるため対馬の歴史家永留久恵の意見を読ませた。永留の主張は次の通りである。

対馬に存在する仏像が全部でどれだけあるのか、正確な数は知らないが、学術調査で報告され、『対馬の美術』に記載された渡来仏は、100体余りある。その中で一番多いのが朝鮮からの渡来仏で、百済仏、新羅仏、高麗仏、朝鮮仏を合わせた総数は87体ある。

この朝鮮系の渡来仏のほかに、日本国内で製作された仏像として、①京都・奈良辺の専門仏師の作と観られる

もの、②九州の大宰府辺の仏師の作と観られるもの、③島内の稚拙な仏師の作と観られるものがある。すなわち朝鮮系、京都系、九州系、島内系と4種類の仏像があったわけで、これも対馬の仏教文化だったと言える。

朝鮮仏を所持しえた者は、朝鮮と通行・市糴（貿易）していた豪族か、外交権も持っていた島主とその一族に多いのは当然で、そのほか交易の権利を持った浦々の長たちがいた。寺院や神社に安置された仏像をよく見ると、そうした背景が分かることがある。

（観音寺の観世音菩薩坐像の）結縁文によって、この観音像が本来、高麗国瑞州の浮石寺の戒信ら三十数名の発願により鑄造されたこと、それが天曆三年（1330年）のことで、瑞州浮石寺の縁者たちがこの観音像を鑄造したことは確実だが、この仏がどうして浮石寺から対馬に來たのか、それに幾つか想像される話はあっても、確認する証拠はない。

韓国では「日本人に盗まれた仏像を取り返した」というそうだが、それが高麗末期の「倭寇」のことであるなら、その「倭寇」を日本人と断定することに大きな疑問があることを知らねばならない。

高麗末期の「倭寇」には、日本人はわずかで、その大半は自国民（高麗の民）だったことを、『朝鮮王朝実録』を引いて前述した。

『長崎県史』『古代中世編』に書かれた倭寇の項によると、日本海賊の所業は当初、高麗の商船を襲い、その商品（交易品）を略奪したものだが、それが高麗の国土に上陸し、住民を侵略するようになった理由として、①高麗と対馬の間にあった通交関係が断絶したこと、②元寇以後、日本人の対外認識が急速に変わったこと、③高麗の弱体化——が上げられている。

日本人の海賊行動について、朝鮮側の記録には単に倭人とした場合が多いが、その内実是对馬人と松浦党の所業だと観られていた。ただし対馬・松浦だけでなく、壱岐・瀬戸内の海人も少なからずいた。そして、それだけでなく、高麗の民も多く倭寇に組していた。

『朝鮮王朝実録』世宗二八年の末節に、前朝末（高麗末期）において、「倭寇」の大半が高麗人であった話を、「これも歴史の鑑」として載せていることは前述した。そこから考えた説として、「高麗時代末の倭寇」には、①日本人だけの集団、②日本人と高麗人の合併集団、③高麗人だけの集団、と3種類の倭寇がいたことが推定されるが、寺や宮から仏像や経典を盗み出すには、盗賊集団の組織の質が一番の問題になる。仏像などの場合、寺院から盗み出す行為は、寺院の境内から院内の事情を知っている自国民が最適である。運び出した物を日本人

（商人）が買い取り、故国に持ち帰って売買した可能性は高いと思う。

永留久恵『盗まれた仏像—対馬と渡来仏の歴史的背景』（交隣舎出版企画 2013年刊より引用）

以上の文書を読ませた後、再度、韓国から対馬へ返すべきかどうか、意見を聞いて書かせた。多くは、はじめと意見を変えなかったが、次のような意見もあった。

・「倭寇」にも日本人だけのグループとそうじゃないグループがあり、「倭寇」といっても、必ずしも日本人だけとは、断言しにくい。そもそも日本人が盗ったという証拠がないので、韓国へ返す必要が無いと思う。

・「倭寇」が日本人だと限らないのに、略奪されたというのなら、おかしい話だと思う。

3. 最後に

今日、日韓双方で対立感情が生み出される一因に、インターネット上の情報や一部の報道によって、真実が見えないようになっていることがある。今回報告した「対馬から考える倭寇」の授業は、一般的な教科書記述を現在、争点になっている対馬という「地域」におろして見ていくことで、一般的な記述では抜け落ちている部分や偏見を明らかにすることを目的としている。韓国の「仏像は、倭寇が盗んだものだから返す必要はない」という主張も、倭寇が対馬、壱岐や朝鮮半島の人々から構成されていることを知れば、一概に言えないことがわかる。

日本と韓国の国境が画定したのは、明治以降の近代国家であり、その認識を倭寇が跳梁した室町時代に持ち込むことは、どだい無理な話である。そのことを踏まえずに日韓双方で争うのは、おろかなことと言わざるをえない。21世紀は、人々が行き交うボーダーレスの時代であり、様々な文物が交流して新しい文化が生まれる時代である。

そうした時代であって、日韓双方で国民感情を煽りあって対立感情を持つことが、いかに時代錯誤の行為であるか、気付く時に来ている。